

日本総合研究所シニアマネジャー

齊木乃里子

介護事業者のコンサルティングを始めて6年になり、様々な職能のスタッフと交流を重ねてきた。介護の仕事は保育とちがい、卒園ではなく死という形で終わりを迎える。

ターミナルケアやみとりに携わるスタッフたちの経験を共有していると、1人の人間の死にとつて家族や血縁の存在はほんの一部と思えてくる。

世間では介護はまず家族が担い、手に負えなくなれば施設に預けるといイメージが流布している。しかし今後の社会ではそのような常識は通用しない。高齢者の増加に対して就労人口が減るため、家族どころか施設で介護サービスを提供する人員すらいない状態が普通になっていく。

すると家族に囲まれたり、施設のスタッフに手を握られ

## 「1人で死を迎える時代」に備えを

ながら最期を迎えたりする姿も普通ではなくなる。つまり多くの人が1人で死を迎えることになるのだ。覚悟し、納得しながら死を迎えられるようにするため、個人や社会は何かできるだろうか。

個人レベルでは、自分の終末について考えをまとめ、周囲の人に提示することが重要である。財産整理が中心の終活にとどまらず、精神的にも社会的にも納得できる死の迎え方について、それぞれが語り合える場が必要である。それは社会にとつても知識や経験の蓄積につながる。

社会の側でも1人で暮らす者同士が支え合うシステムを作っておく必要がある。その前提となるのは、ある程度まで自分や周囲のケアができる住民を増やすことだ。その上で自立した住民がボランティアや有償サービスに参加する仕組みができれば、介護サー

ビスの人材不足にも対応できる。ただし人々の自立には、介護の体験教室などの充実が欠かせない。子供の時から老いや介護について学ぶ機会も増やさなければならぬ。

先端技術を活用する領域も多くある。インターネットや人工知能(AI)を活用し、集合住宅や商店などの生活インフラがネットワークとして見守りの機能を果たせる仕組みは整備できるだろう。とりわけ1人で亡くなった人を早期に見つけられるシステムを多くの関係者が求めている。最後に社会システムの構築にとつて重要なのは考え方の変革である。1人で死ぬことを不謹慎だとか縁起でもないと思えていたかぎり、個人も社会も次のステップに進めない。自分自身が最後まで納得した生を送るため、新しい時代の死についての議論を今から始めるべきである。